

# 年少者日本語教育ゼミ

木曜日 6限 S102

○概要 主に、外国人児童生徒を対象とした日本語教育について、学校現場の実践や研究成果を基に議論をしています。

○目的 将来、学校で日本語を教えたり、地域のボランティアに参加したり、海外で日本語を教えるための基礎的な知識や授業の設計や指導の仕方を学ぶことです。また、先行研究や文献にあたり、卒論や修論のための準備の意味もあります。

○進め方 担当を決めて文献について報告します。内容について質疑応答をし、テーマについて議論します。

○人数 1年生1人・3年生4人・4年生5人・院生3人の計13人です。

○平成 26 年度秋学期の活動内容

・外国人児童生徒の言語能力に関する論文の講読

「外国人児童の就学時における日本語会話力」『日本語教育』142号

・教室内の外国人児童生徒の教室内の学びに関する論文の講読

「日本語教室における教師・子ども間の相互作用」『国際教育評論』No. 8

・小学校の日本語教室における研究授業の報告 池袋小学校等



## 先輩の声

A 類日本語教育選修 4 年生 成田沙紀さん  
「フォーカス・オン・フォーム指導」

Focus on Form (Long1988) とは、意味重視の活動の中で、必要に応じて学習者の注意を言語形式に向けさせる教育的介入のことです。

(例) インพุット洪水：特定の言語形式を頻繁に使用する。

インพุット強化：下線や矢印などの視覚的目印により、特定の言語形式を目立たせる

明示的な説明：簡単な文法説明の挿入

宇佐美 (2013) は接続詞「で」の指導について、短時間内のインพุット洪水だけでは注意が向きにくく、それにインพุット強化、明示的説明に加え、さらにその後も継続的にインพุットがなされることで、自発的使用が促されると考察しています。しかしこれは成人の話。FonFの研究は年少者を対象としたデータは 合わせて少なく、子どもゼミでは FonF を含めた年少者の言語習得について勉強しています！

A 類日本語教育選修 4 年生 山本美帆さん

『「往還する人々」の教育戦略

—グローバル社会を生きる家族と公教育の課題—』

志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶到・ハヤシザキカズヒコ (2013) 明石書店

第2章第4節は、日本や海外の公教育やインターナショナルスクール、民族学校など複数の学校システムで教育を受けた子どもたちの学力やアイデンティティについて書かれてあります。そこに、印象に残る言葉がありました。「そういう（国際結婚家庭の）子どもたちにとって必要なのは二つの文化と言語をバランスよく受け継ぐことだと思います。子どもたちは日本人・日本人以外のどちらでいても心地良くあるべきだと思います。」です。これは、国際結婚家庭の日系アメリカ人の母親へのインタビューにあったものです。

こうした言葉から、国際結婚家庭児や帰国生が増加する現在、この言葉のように海外にルーツを持つか持たないかに関わらず、お互いに様々なアイデンティティを認め合うことができるような教育を目指していきたいと感じました。

A 類日本語教育選修 4 年 文珠寺江美さん

「進路とゼミとのつながり」

私は卒業後海外の日本人学校で勤務するため、卒業までのゼミでの活動を通して、子どもの言語獲得の過程について学んだり、多言語環境にいる子どもたちの言葉の力の育み方や学校現場における支援のあり方について考えたりすることで、将来の現場での活動に役立てたいと思っています。現在でも、実際にゼミで扱った事例や学んだ理論が、私が参加している、外国にルーツを持つ子ども達の教科学習支援をするボランティアでの経験や実践とつながっていると感じています。子どもの言語獲得や習得過程、また多言語多文化環境で育つ子どもたちの興味のある方はぜひ参加してみてください。

A 類日本語教育選修 4 年 小倉奈々恵さん

『多文化に生きる子どもたち』山田千明 (明石書店)

日本へ乳幼児期にやってくる外国籍の子どもたちの増加、それに伴って文化という概念の捉え直し、彼らへの教育課題の緊急性の高まりなど様々な変化があることが分かりました。乳幼児期からの異文化間教育の必要性を再認識するものでした。

現在は、卒業論文のテーマを外国にルーツを持つ就学前の子どもたちへの就学前教育の役割と課題とし、乳幼児期からの教育実践について調べています。

多言語多文化の環境で育つ子どもへの日本語教育に少しでも興味がある方はぜひ参加してみてください！